釋尊の成等正覺について

園　　正　造

はしがき

簠簋（三國相傳，安部清明撰）を見ると，

甲午　釋迦雪月八日寅一天成等正覺日也

とある。此の雪月八日が如何にして甲午から導かれたか。之を明かにするのが私の主なる目的である。併し一般讀者諸兄には印度の事情や，佛教關係の事項について，少しく説明を與えるのが有益であり，また興味も生ずることと思い，前半に之を説き，本題は後半に讓ることとした。

ここに御斷りすべき事がある。二月中旬に目を醒すと，左手が動かず，舌に縺れがある。驚いて醫師の診斷を求めた。幸に息子方に當日見えるので，二時間半程して來診を得た。その時には舌の縺れも解け，左手も動き平常と何等異る所もなかった。至極輕微の腦溢血であった。御醫者様から細々と注意を得て，服藥食事に意を用い，三週間を過ぎた。そこで再び原稿を書き始めた。驚いた事に物忘が多く，疲勞が早いのである。從って文辭拙劣となり，意のある所に達し得ない怨みがある。此の點讀者諸兄の御賢察を御願い出來れば誠に幸と存じ，茲に一言を呈する次第である。

古代の印度

§1　古代の印度民族

太古のことである。世界の屋根パミル高原（Pamir）の近くで遊牧生活を營んでいた一民族アリアン（Aryan）は南に向って移動を始め，ヒンヅクシー山脈（Hindukush）を越えた所で二派に分れ，一部は西南してイラン（Iran）に入り，他はなお南行して印度河の上流五河地方（Panjab）に到り，此所に住居を定め，農牧の生活を營むこととなった。そして他民族との戰いもあったが，遂に**吠陀文化**（Veda）を創出するに至った。これ印度に於ける最古の文明である。

更に移動をなす者もあり，恒河（Gaṅga）に沿うて東南に赴き紀元前一千年頃には河口附近に達した。五河地方への移動から此の邊までを以って曆の第一期**吠陀期**とする。五河地方への移動は紀元前十二世紀，又はそれ以前である。之を中國曆について見ると，殷庚丁（1211 B.C.），周武王（1122 B.C.），そして周穆王（1001 B.C.）であり，從って第一期は周の時代

と見て大して誤を生じない。

序ながら第二，第三期について一言する。第二期は**後期吠陀**といわれ紀元前十世紀頃に始まり，第三期は**悉曇期**（Siddhânta）と稱え，紀元後第五世紀から第六世紀に至る間に始まる。卽ち第二期は周穆王を以って始まり，第三期は梁初代武帝（502 A. D.）を以って始まると見てよい。

§2 婆羅門，四姓

印度の民族は一般に敬神の念厚く，祭祀儀式を重じ，司祭は當初各家の長又は各族の長の任務であったが，後には祭祀儀式を司ることを職業とするものを生じた。そして此等の人達を婆羅門（Brâhmana）と稱するようになった。

また歲月の經過につれて人口も漸次增大し，他民族に對しては勿論，同民族の間にも紛爭を生じ，强食弱肉，群雄割據の狀態となった。從って各地方に小國家が續出し，國家の長を王（Râja）と稱した。そして王とその幕下のものを總稱して刹帝利（Ksâtriya）といった。

更に商業を營むものを毘舍（Vaisya），賤業に從事するものを首陀羅（Sûdra）と呼んだ。印度では職業世襲の風習があったので，自然と四姓の別を生じた。卽ち婆羅門，刹帝利，毘舍，首陀羅で，このうち婆羅門が最上位となった。

四姓のうち首陀羅が最も蔑視されていた。併し釋尊は之を認めず，種姓によって人の價値を定めずして，道德の實行如何によって區別した。例えば首陀羅出身の優波離の如きは，持律第一の稱を得て十大弟子の一に數えられた程である。

§3 吠陀文明

吠陀は神に祈願又は訴願する場合の詩を集錄したものである。詩を誦するに當って大聲合唱する場合と司祭が低聲獨唱するものとがある。吠陀に四種類あり，

㈠ Rig-Veda. アリアン人が南下して五河地方に到るや，自然の雄大壯麗なることを感じ，これを神とし，これに奉ずるに供物を以ってし，ソーマ液を注ぎ，子孫の繁榮と家畜の增殖とを祈った。これに當って詩人は詩を作り，神前に誦して神意を得んと念願した。此等の詩を集錄したものが Rig-Veda である。Rig は賛美歌のことである。

㈡ Yajur-Veda. Yajur とは供物の義，卽ち神に供物をなすに當って婆羅門が低聲誦讀する所のものである。

㈢ Sâma-Veda. ソーマ式を施行するに當り，婆羅門が唱歌する詩である。

㈣ Atharva-Veda. 神力，魔術を念じ，以って疾病，猛獸，怨敵の難を避け，人生の幸福を祈る詩を集めたものである。

そして上の四者のそれぞれに集錄がついており，それを Samḥita と呼んでいる。更に Veda が編纂されるや，婆羅門に獨創力の乏しいものもあり，又宗教的儀式はいよいよ複雜となった

ので，Veda 儀式に關する註疏の必要を生ずるに至った。これ Brâhmaṇa（梵書）發生の理由である。そして Veda は詩であるが，Brâhmaṇa は散文である。

§4　釈尊降誕の状況

釋尊（Śâkya muni）の降誕年紀については，色々の説があり，明確を欠くが 565 B. C. 前後と見るのが最も眞に近いらしく思われる。我國でも 565 B. C. 又は 564 B. C. を用いる人がある。併し今は事の眞疑を問わず，主として諸教典について降誕時の狀況を摘記することとした。（但し教典には年紀不記である）之によって信仰の人としての釋尊を知ることが出來る。

釋尊は王種である。父は迦比羅（Kapilavastu）城主淨飯王（Śuddhodana），母は同族狗利（Koli）城主阿菟釋迦（Anuśakya）の女摩耶（Mâyâ）である。兩城は近接し，中印度の最北部である。淨飯王五十餘歳のとき，漸く一子を得て，之を悉達多（Siddârtha，目的成就）と名づけ，喜悅滿面であった。不幸にして生母は產後七日で他界し，以後は母の妹波闍波提（Prajâpatî）によって育てられた。釋尊廿歳に至らずして狗利城主善覺王（Suprabuddha）の女耶輸陀羅（Yaśodharâ）を迎えて妃とし，一子羅睺羅（Râhula）を得た。併し釋尊は厭世的で，常に沈思冥想に耽っていた。

§5　諸教典による降誕の記

㈠　長阿含經。後秦弘初元年（399 A. D.）佛陀耶共竺佛念譯。

如是我聞一時佛在舍衞國花林窟與大比丘衆千二百五十人俱。時諸比丘於乞食後集花林堂各共議言。

佛時頌曰。過九十一劫有毘婆尸（Vispassin）……

佛告比丘諸佛常法毗婆尸菩薩當其生時從右脇出專不亂。時菩薩母手攀樹枝不坐不臥。時四天子捧奉香水於母前立言唯然天母。今生聖子勿懷憂慼。此是常法。爾時世尊而說偈言。

佛母不坐臥住戒修梵行生尊不懈怠天人所奉侍。

佛告比丘諸常法。毗婆尸菩薩當其生時從右脇出專念不亂。從右脇出墮地行七步。無人扶侍遍觀四方舉手而言天上天下唯我爲尊。要度衆生生老病死。此是常法。……

太子初生。父王槃頭召集相師及道術。令觀太子知其吉凶。時諸相師受命而觀。卽前披衣見有具相。占曰。有此相者。當趣二處必然無疑。若在家者當爲轉輪聖王。王四天下四兵具足。以正法治無有偏枉恩及天下。七寶自至。千子勇健能伏外敵。兵枝不用天下太平。若出家學道當成正覺。十號具足。時諸師卽白王言。王所生子有三十二相。當趣二處必然無疑。在家當爲轉輪聖王若其出家當成正覺十號具足。

なお在家轉輪聖王，出家成等正覺の件は大唐西域記（玄奘編）にも載っている。

(二) 修行本起經　卷上

後漢　西域三藏竺大力共康子詳譯

菩薩降身品　第二。於是能仁菩薩。化乘白象。來就母胎。用四月八日夫人沐浴。塗香著新衣畢。小如安身。夢見空中有乘白象。光明悉照天下。彈琴鼓樂絃歌之聲。散花燒香。來詣我上。忽然不現。夫人驚寤。王卽問曰。……十月已滿。太子身成。到二月七日（七＝八），夫人出遊過流民樹下。衆花開敷。明星出時。夫人攀樹枝。便從右脇墮地。行七步。擧手而言。天上天下。唯我爲尊。三界皆苦。吾當安之。應時天地大動。……（經文に四月とあるも，二月の方が正しい。）

(三) 佛說太子瑞應本紀經　卷上　吳月支優婆塞　支謙譯

菩薩初下。化乘白象。冠日之精。因母晝寢。而示夢爲。從右脇入。夫人夢寤。自知身重。王卽召問大卜。占其所夢。卦曰。……到四月八日夜明星出時。化從右脇生墮地。卽行七步。擧右手往而言。天上天下唯我爲尊。三界皆苦。何可樂者。是時天地大動。……

(四) 異出菩薩本起經　一卷　西晉聶道眞譯

迦維羅衞國者，天地之中央也，佛生者。不可邊土餘國。地爲之傾側。迦維羅國王。爲人賢。卽下入王夫人腹中。但有不淨故。無所附近。左右群臣。及隣國請可屬迦維羅衞國者，聞王夫人有娠。皆來賀大王。前爲夫人作禮。太子從腹中見外人。如蒙羅穀中視見外人。外人作禮。太子於腹中。以手攘之。所以攘之者何。不欲煩擾天下人也。夫人懷抱太子時。天上諸神。日持天上飯食。來置夫人前。夫人不知飯食所從來。不能復食王家飯食。王家飯食。苦且辛。太子以四月八日夜半時生。從母右脇生墮地。行七步之中。擧足高四寸。足不蹈地。卽復擧右手言。天上天下尊無過我者。四天王卽來下作禮。抱持太子。置黃金机上。和湯浴形。王與夫人。左右皆驚。……

(五) 過去現在因果經　卷第一

宋天竺三藏　求那跋陀羅譯

爾時菩薩。觀降胎時至。卽乘六牙白象。發兜卒宮。無量諸天。作諸伎樂。燒衆名香散天妙花隨從菩薩。滿虛空中。放大光明普照十方。以四月八日明星出時。降神母胎。于時摩耶夫人。於眠寤之際。見菩薩乘六牙白象騰虛而來。從右脇入。影現於外如處琉璃。夫人安快樂。如服甘露顧見自身。如日月照心大歡喜。踊躍無量。見此相已。豁然而覺。……

菩薩處胎。垂滿十月身諸支節及以相好。皆悉具足。……充滿虛空。爾時夫人。既入園已。諸根寂淨。十月滿足。於二月八日日初出時夫人見彼園中。有一大樹名曰無憂。花色香鮮。枝葉分布。極爲茂盛。卽擧右手欲牽摘之。菩薩漸漸從右脇出。于時樹下。亦生七寶七莖蓮花。大如大車輪。菩薩卽便墮蓮花。無扶持者自行七步。擧右手

而獅子吼。我於一切天人之中。最尊最勝。無量生死。於今盡矣。

(六) 佛所行讃　卷第一（馬鳴菩薩造）

北涼天竺三藏　曇無讖譯

爾時摩耶后。自知產時至。假寢安勝床百千婇女侍。時四月八日清和氣調適。齊戒修淨德。菩薩右脇生。大悲救世間。不令母苦惱。

(七) 佛本行集經　隋天竺三藏　闍那崛多譯

俯降王宮品第五品に降神母胎の記事あり，鬼宿合之時降神母胎となっている。又樹下誕生品第六に降誕の記事あり，春初二月八日鬼宿合時となっている。兩者共に詳細で一讀の要あるも省くこととした。

(八) 佛說灌洗佛形像經　西晉沙門　釋法炬譯

爾時佛告摩訶刹頭諸天人民。皆一心聽。

佛言。人身難得。無爲道亦然。佛世難値。吾本從阿僧祇劫時。身爲白衣累劫積德。每生自剋展轉五道。不貪財寶。棄身施與無所愛惜。自致王太子。以四月八日夜半明星出時。生墮地行七步。擧右手而言。天上天下唯吾爲尊。當爲天人作無上師。太子生時地大動。……

佛言。所以用四月八日。以春夏之際殃罪悉畢。萬物普生毒氣未行。不寒不熱時氣和適。正是佛生之日。……

(九) 佛說　摩訶刹頭經。亦名　灌洗形像經

西秦沙門　釋聖堅　譯

摩訶刹頭諸天人民長老皆聽。夫得爲人難。無上道亦然。人命難得佛世難値。釋迦文佛本出阿僧祇劫時。佛身作白衣時。累功積德每生自剋。展轉五道不貪財寶出身施與。自致爲王太子。以四月八日夜半明星出時。生墮地行七步。擧右手而言。天上天下我當爲人民作師。太子生時天地皆爲大動。……

上記を通覽するに，降神母胎の記載あるものは，降神母胎四月八日で，降誕は二月八日である。降神母胎の記載のないものは降誕四月八日となっている。

季節を見るに，二月八日は衆花開敷とか，花色香鮮，如大車輪とか記され，四月八日に對しては萬物普生毒氣未行，不寒不熱，時氣和適とあり，氣候は何れも良好である。そして出生は夜分である。

また降誕の際に天上天下唯我爲尊云々の宣言があり，釋尊に對する信仰が如何に深厚なるかを示すものである。

更に降神母胎，降誕はすべて八日となっているが，此の日に限らない。十五日の場合もある（大唐西域記參照）。なお我國では降神母胎を考えず，降誕四月八日である。

§6 古代印度の暦

印度人は古くから一年を360日として暮らしており，吠陀期の文獻にも一般にそれが現われている。吠陀期は 1200 B. C. 頃に始るから，この頃又はそれ以前から一年360日であったのであろう。

五河地方に於ける氣候の關係上，當初一年は夏（samâ）と冬（hima）との二時に分たれていた。農耕の發達につれて，熱時，雨時及び寒時の三時となり，各時の始めに供物をして神々を祭った。印度の東部と南部とでは，これで良かったが，他の地方では氣候の關係などで，これに滿足し得なかった。そこで各時を二分し六時を以って一年とした。

更に太陽の運行について春分と秋分を知るようになり，一年360日は短か過ぎるので，一年を十二月（各月30日）に分ち，時々第十三月を添えるようにした。第十三月は aṃhasapati と呼ばれ，閏月に該當するものであるが，置閏の方法は明示されていない。

§7 星宿（Nakshatra）

太陰が地球を一周するに要する日數は27⅓日である。（之を恒星月 siderische periode という。）故に天空に27又は28個の恒星群を創定すれば，太陰は恒星群の一つに凡そ一日間駐留することになる。此等の恒星群に夫々名稱を與えたものを**星宿**という。そして各宿にその主神を定めた。卽ち次表の通りであるが，Veda には27個の星宿を持つものはない。併し二三個はあるが，Brâhmaṇa には27星宿が在る。又星宿が早くから印度に存在したのは，占星術が廣く一般市民の間に傳幡していたからであると云われている。（本表は Ginzel から借用したものである。）

星宿	主神	
1. kṛittika	agnî 火神	
2. rohiṇî	prajâpati	造物主
3. mṛigaśiras	月神	
4. ârdrâ	rudra	嵐の神
5. punarvasu	aditi	光の神
6. pushya	vṛihaspati	Jupiter
7. âśleshâ	蛇神	
8. maghâ	pitri	先祖，祖宗
9. pûrvaphâlgunî	bhaga	光神の一

10. uttaraphâlgunî	aryaman	光　神
11. hastâ	savitri	太陽神
12. chitrâ	trashtri	技術者　雷火を起して Indra 神を感動せしめた
13. svâti	空　氣	
14. viśâkhâ	Indra, 火神	
15. anurâdhâ	mitra	日中の太陽
16. jyeshthâ	Indra	有力の天神，帝釋天
17. mûlam	nirriti	不信實，不正直
18. pûrvâshâdhâs	水　神	
19. uttarâshâdhâs	visvêdêvas	人の幇助，保護をなす神，卽ち救世主
20. abhijit	Brahma	風梵摩神
21. Śravana	Vishnu	
22. Śravishtha	vasus	
23. śtabhishaj	varuna	總てに對する神
24. p. bhâdrapadâs	ajackapâd	
25. u. bhâdrapadâs	ahibudhnya	
26. revati	pusham	育生者
27. âśvinî	die âsvins	光の神
28. bharanî	yama	死の王，亡者の收容者

§ 8　星宿による月名

祭祀の司祭は祭日を定めるに當って，先ず星宿を選び，そしてそれの滿月とか又は新月とかにした。從って一年の月名は星宿によるのが利便のようになった。そして選ばれたのは前節の表に於ける No. 1, 3, 6, 8, 9, 12, 14, 16, 18, 21, 24, 27 である。ここに第一月 Phâlguna は(9)に當るものである。卽ち

1. Phâlguna
2. Chaitra
3. Vaiśâkha
4. Jyeshtha (Jyaishtha)
5. Âshâdha
6. Śrâvana
7. Praushthapada (Bhâdrapada)
8. Âsvayuja (Âśvina)
9. Kârttika
10. Mârgaśirsha
11. Taisha (Pausha)
12. Mâgha

これは太陰太陽暦にも用いられるのであるが，Rundjahr の場合に閏月が明記されていない。併し暦のことは婆羅門が專ら司る所で，一般民衆には餘り關心がなかったらしい。

上の名稱は地方的に變更はあるが，今日なお全國的に使用されている。

§9　閏月につき苾芻の無知

根本說一切有部尼陀那（唐　義淨譯）の一說に，供養があり婆羅門も同席して居たと見え，時有羅門居士來問苾芻曰。聖者。今是何月。答言。今是室羅末拏月（Śrâvaṇa）。彼復問言。聖者。諸人咸云。阿沙荼月（Âshâdha）。仁等乃云。室羅末拏月。豈仁等不爲閏月耶。答言。不爲。人皆共笑。時緣白佛。佛言。應爲閏月。時諸苾芻於每年中恒爲閏月。俗人來問。聖者。今是何月。答云。是阿沙荼月。彼復問言。聖者。諸人咸云。今是室羅末拏月。仁等乃云。阿沙荼月。豈仁等於每年中爲閏月耶。答言。如是。同前譏笑。苾芻以緣白佛。佛言。不應於年中而作閏月。應至六歲方爲閏月。時有國王。至二年半便一閏。苾芻不隨。人共嫌恥。

とある。この話は釋尊の在世時であるから暦的に第二期に當るが，苾芻に閏年について何の知識もなく，從って雨期の安居に入るべき Śrâvaṇa 月を取り違えたことを示している。甚だ皮肉である。

中　　國（太初暦）

§10　簠簋（三國相傳，宣明暦經註。安部清明撰）

今迄は總て印度に關する事であったが，此處で局面を變えて中國に移り，簠簋を見るに

三宝上吉日事

丙寅〻　舍利弗，誕生日也。終ニ入リ佛室ニ　蒙リ　智慧第一ヲ　十四歲ノ辰降リ叔父長爪梵士ヲ　然ノ而望ニ　佛場ニ矣

壬午〻　佛祇園精造立ノ日也故ニ堂塔建立ニ吉シ　此ノ寺〻三千第一ノ佛室也　法藏建立ニ用レ之ヲ

庚寅〻　釋迦入ニ壇特山ニ日也　故ニ入學剃髮登山授戒願始行甫弟子取初等ニ專可レ用レ之ヲ。

甲午〻　釋迦雪月八日寅ノ一天ニ成シ玉ヲ等正覺ヲ日也　故ニ坐禪入定佛法傳授等專可レ用レ之ヲ

丁酉〻　大迦葉授法ノ日也　於テ今世ニ法流更ニ不レ斷也

己酉〻　目連尊者始テ入リ佛室ニ　賜玉ヲ　神通第一名譽ヲ　日也　故ニ入學授戒勤行始等ニ　尤大吉日也

中吉日

丙寅〻　阿闍世王輪ノ惡逆ニ成ル佛弟子ト日也

丁卯〻　妙莊嚴王變ノ惡心ヲ依テ王子ノ德ニ詣玉ヲ佛場ニ日也

辛未〻　釋提桓因修ニ行佛法ヲ　上ニ轉輪聖王ノ位ニ日也

庚辰〻　舅荼訶女佛ニ捧テ生ス衣ヲ改テ成玉ヲ福報光明女ト日也

癸酉〻 吉祥天女誕生日也　同四天王佛法擁護〻日也

下吉日

庚午〻 普明王傳授玉八偈文遁玉班足王殺害日也

丁丑〻 雪山童子修行佛法依半偈〻文蓮華化生給日也

辛巳〻 太施太子汲大海蒙玉眞女摩尼洙日也

戊寅〻 波羅奈國〻太王勤檀波羅蜜〻行成玉十六太國尊主日也

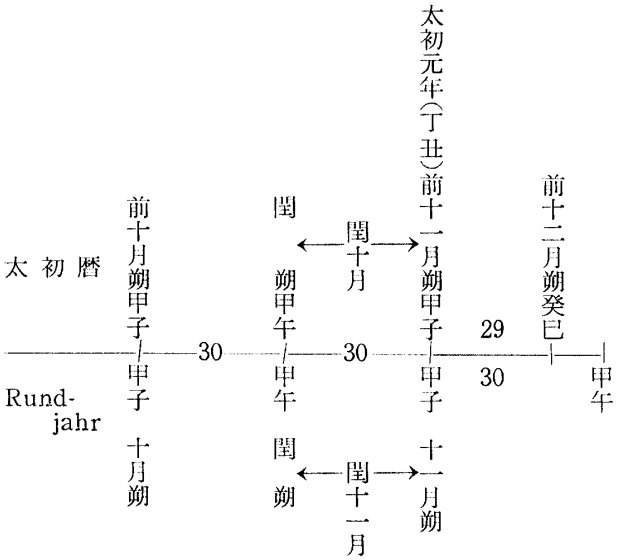
丙午〻 尸毗大王行檀波羅蜜爲鳩鴿雌鷹〻擲命同預迦葉佛〻授記顯玉釋迦牟尼佛ト日也

辛亥〻 鹿王始行六度終爲施鹿太子替懷胎〻鹿未代持〻狐狸熊羊〻命成獅子王菩薩ト日也

とある。何れも信仰をもととした神話的の様相を呈しているが，その中に唯一つ異彩を放っているものがある。卽ち甲午釋尊の成等正覺である。月日を記入したのは之れのみで，此件は釋尊が卅二相を備えられ，在家して轉輪聖王となられるか，又は出家して成等正覺されるかである。釋尊として最も重要な時機である。この雪月八日が如何にして導かれたか。之を明かにするのが私の主要な目的である。以下順を追って簡明に之を解く。

§11　太初暦と Rundjahr との連結

中國暦について正確とされている最初のものは漢の武帝 104 B. C. を以って始まる太初暦である。そこで 104 B. C.（丁丑）以後は太初暦を使用し，それ以前は Rundjahr を用いることとする。卽ち太初元年（丁丑）前十一月朔旦（夜半）冬至（甲子）。この冬至の日を以って兩暦の接續點とする。



中國では閏は後の月として十月，閏十月，十一月とするが，印度では十月，閏十一月，十一月とするのである。

§12 Rundjahr の閏月，一ヶ年の日数

朔望月を29½日とすれば，Rundjahr で月（30日）のうちに二回朔日を生ずることがある。かかる月を**閏月**と定義する。例えば前節の接續圖に於て前十一月の初日は朔旦冬至であり，從って前十一月の前月は閏である。そして此れを閏十一月と呼ぶのである。

閏月の分布を見るために，九月の前月を閏とする。卽ち閏九月，九月となり，之を以って始める。

初年度　閏九月	二十年度　閏正月
五年度　閏七月	廿五年度　閏十一月
十年度　閏五月	三十年度　閏九月
十五年度　閏三月	

となる。卽ち廿九年を以って終り，二十六，二十七，二十八，二十九年度には閏が無く，平年である。之を要約すれば廿九年で閏が一循環することになる。

次に Rundjahr に於ける一ヶ年の平均日數を求めるに，先ず29年間の月數は普通月 29×12 月と閏月 6 ヶ月である。そしてこの日數は

$$29\times12\times30+6\times30=29\left(12\times30+\frac{6\times30}{29}\right)=29\left(360+6+\frac{6}{29}\right)=29\left(366+\frac{6}{29}\right)$$

である。故に一ヶ年平均$366+\frac{6}{29}$日となる。これ Rundjahr に於ける一ヶ年平均日數である。少し長過ぎるように見えるが，これが後に必要となる。

§13 成　等　正　覺

Ginzel, Chronologie に依れば，釋尊涅槃は 950 B. C.（歳滿79歳），又は 949 B. C.（歳滿80歳）とある。之によれば，降誕 1029 B.C. となり，又成等正覺は歳30として，999 B.C. である。但しこの年紀は Rundjahrによったものである。

太初元年を遡ること成等正覺は

999B.C.−104B.C.＝895年

である。然るに　895＝29×30＋25

これに於て，29年では元に戻り，25年は閏十一月甲子（冬至）を以って終る。（接續圖參照）そして次の四年間（26，27，28，29年度）は平年で閏月はなく，卅年度は初月（九月）が閏となる。

さて廿六年度の初月は接續圖が示すように，初日甲子で，次の月の初日は甲午である。この甲午の日を吟味する。太初曆によれば，前十二月一日癸巳であるから甲午は第二日となる。太初曆前十一月初日甲子は朔旦冬至であるから零日であるが，これを第一日と見るから甲午は第

二日となる。太初暦によるから元年に閏はない。然るに Rundjahr に於ける一ヶ年の平均日數は$366+\frac{6}{29}$であり，Rundjahr の360日よりは$6+\frac{6}{29}$日多い。依って太初元年以後，太初暦を使用するとすれば，一年に$6+\frac{6}{29}$日増さねばならぬ。故に甲午の第二日は

$$第二日+6+\frac{6}{29}=第八日+\frac{6}{29}\ (=第八日午前4.8時)$$

となる。卽ち前十二月甲午の日は前十二月第八日午前4.8時に當ることとなる。これを要するに太初暦前十二月甲午は前十二月第八日に當ることになる。

ここに於て Rundjahr を解消して，太初暦に於て前十二月甲午は前十二月八日に當るものとし，釋迦の成等正覺の日とする。卽ち簠簋のように

甲午〻釋迦雪月八日寅〻一天〻成二等正覺一日也

となり，釋尊は太初暦で十二月八日成等正覺されたことになるのである。我國でも十二月八日正覺會が行なわれる。

注意1. 上中下の吉日に記載の事項は互に獨立で，その一つから他が導かれることはない。從って釋尊の成等正覺があるから降誕，涅槃は記してない。但し干支の間には多少の關係があるらしく見られる。

注意2. 本節の計算法は特有なもので，妄りに他の吉日に倣うべきでない。

§14 当初（§13）に戻り釋尊の降誕，正覺，涅槃を見るに太初暦により

1029 B. C. 降誕（周昭王の時）

999 B. C. 十二月八日正覺（周穆王の時），

950 又は 949 B. C. 涅槃（周穆王の時）

となる。そして日附は顓頊暦又は殷暦であろうが，降誕四月八日，涅槃二月十五日である。これについて御愛嬌までに天保十五年發兌の女訓百人一首に，奥儀抄の拔萃らしいが，

四月八日　釋迦佛誕生日（灌佛）

唐土（モロコシ）の年代で周昭王二十四年四月八日降誕とあり，周の世には霜月を正月としたる故，今日本の二月八日に當る也。ただ四月といふをとり此の日を用ひたるなるべし。今日禁中にても灌佛し賜ふと也。

二月十五日　釋迦佛入滅（涅槃）

周穆王五十二年二月十五日　佛涅槃　とあり，周の世には霜月を正月に用ひたれば，二月といへるは今日本の十二月にあたる也。時代のかはりを考へずしてただ二月といへるにより今の二月十五日に行ふこととなるべし。

とある。降誕や涅槃の日附には宗教上の尊重性と親愛觀があり，無暗に變更すべきものでない。現在日本に於ける新舊兩暦を見るに，兩暦のそれぞれに降誕は四月八日，涅槃は二月十五日となっている。成等正覺はその日が太初暦で定ったのであるから新暦の十二月八日に載って

いる。太初暦で成等正覺十二月八日を定めたのは大いに有意義で，且つ甚だ賢明な措置であったと思う。

§15 注　　意

通常の計算では始點に於ける干支その他を知って，終點に於ける干支その他を求めるのであるが，逆に終點に於ける干支その他を知って，始點に於けるものを求めることもある。卽ち逆計算とでもいうべきものである。例えば終點は閏十一月甲子（冬至）とし，始點は999B.C.＋29n 年とすれば

999 B.C.＋29n年－104 B.C.＝（895＋29n）年＝29×（30＋n）＋25年

となり，§**13.** の成等正覺と同一結果を得る。卽ち始年度に於て29年の倍數の增減が許される。從って簠簋に於ける上中下の吉日は年紀を考えてい無いことである。

§16 涅　　槃

主要題目について色々と工夫を凝して見たが纏りが良くない。就いては印度に逆戻りして釋尊の涅槃について簡明に一言する。北方ヒマラヤに meru の神殿があり，南方セイロンの上空に惡魔が磐居し，その行動が日蝕を左右するといわれ，賭事をするとき南方を向かないとの習慣を持つ人もあった。古來印度では北方を尊んでいた。長阿含經に

爾時世尊入拘尸城向本生處末羅双樹間告阿難曰。汝爲如來於双樹間敷置牀座**頭北首面向西**。所以然者吾流布當久住北方對曰。唯然。卽敷座令北首。

とあり，また善見律毘婆沙序品第一（齊永明六年，蕭齊外國三藏伽跋陀羅譯）に

於俱尸那末羅王林娑羅双樹間二月十五日平旦時入無餘涅槃

とある。

次に年紀について Ginzel, Chronologie によれば，ビルマの宗教暦では 544 B. C. であるが，歷史家は 478 B. C. としている。南方印度人は 544 又は 543 B. C. で，ビルマ人，セイロン人，シャム人は 543 B. C.，ペグー人は 558 B. C. である。北方では範圍が非常に廣く 2422 B. C. から 546 B. C. まである。中國，日本，蒙古，トンキンは950，又は 949 B. C. となっている。又白衣派は 527 B. C.，露身派は 548 B. C. である。

また衆聖點記に佛滅年代を 485 B. C. としており，これが實際に最も近いらしく見られている。

§17 大唐西域記（玄奘編）

拘尸那揭羅國の條。

諸先記曰。佛以生年八十。吠舍佉月後半十五日　入涅槃。當此三月十五日也。

說一切有部則。佛以迦剌底迦月後半八日　入般涅槃。當此九月八日也。

劫比羅伐窣堵國の條。

上座部。菩薩以二隘咀羅頻沙茶月三十日夜一降二神母胎一。當此五月十五日也。

諸部則。以二此月二十三日夜一 降神母胎。當此五月八日。

降誕。以二吠舍佉月後八日一。當此三月八日。

上座部則曰。以二吠舍佉月後半十五日一 當此三月十五日。

摩揭陀國

如來以二印度吠舍佉月後半八日一 成等正覺。當此三月八日也。

上座部則 吠舍佉月後半十五日成等正覺。當此三月十五日也。是時如來三十矣。或曰年三十五矣。

上について涅槃，降誕，正覺を見るに，後の二者は上座部と諸部とで月が同じく，ただ日を異にするのみであるが，涅槃のみは半年間月が違っている。この點は留意すべきことである。

我國で涅槃二月十五日，降誕四月八日としており，そして涅槃は上座部的で，降誕は諸部的である。また正覺十二月八日は再々いうように特有のもので，諸部的である。

（注意）西域記で印度月の後半十五日を數字月の十五日とし，後半八日を數字月の八日と譯している。そして數字月十五日は上座部とし，數字月八日は諸部としている。

§18 釋迦八相，三十二相

釋迦八相は，釋迦が一生涯に示された種々の事件のうち八件取り上げたもので，八相成道ともいう。卽ち

(1) 降兜卒 (2) 託胎 (3) 降誕 (4) 出家

(5) 降魔 (6) 成道 (7) 說法 (8) 涅槃

である。この中で成道が釋迦一生涯のうちで最も大切な事件で，他の七つも要するに成道の變形とみることが出來るのである。

降兜卒とは，天上から何處へ降りようかと普く下界を見渡して，遂にカピラ城の淨飯の王宮に託胎下降されたのである。

釋迦は色々の勝れた尊い相を具えて居られ，その中で三十二の特色あるものがある。例えば

足安平相（足の底の肉が滿ちて平なこと）

千輻輪相（足の底に輻輪の文彩がある。これを石上に彫刻したものを**仏足石**といい，これを見て拜むと無量の罪障を消滅するという。）

身如獅子相（威容嚴肅なこと）

肩圓滿相（肩がいかっておらぬこと）

などである。

釋迦は三十二相を具備して居られ，長阿含經にあ

るように出家して成等正覺されたのである。従って釋迦八相のうち成等正覺が最も重要である。そしてこの日は，中國で最初の正確な暦（太初暦）で十二月八日であった。

なお我が國で使用しているものを再記すると

(1) 成等正覺　十二月八日（中國で諸部的）

(2) 降誕　四月八日（印度で諸部的）

(3) 涅槃二月十五日（印度で上座部的）

である。これを以って稿を終るに當って小田良弼君，藪内清君に對して，その心勞を深謝する次第である。（終）

昭和四十三年七月四日　　岡崎市百々町　著者　識